

## 総同盟との訣別、左傾化した総評からの脱退

島根県・元UIゼンセン京都府支部長・金田直樹

### 総同盟との訣別

この歴史は、ゼンセン同盟大阪府支部長を最後に勇退され、現在、京都市にお住まいの先輩・田中時雄さんに、平成14年10月31日に金田直樹がお会いして聞かせてもらったものです。〈作成：平成14(02)年11月28日〉(編者注：田中さんは平成16年9月22日ご逝去)

**金田**：現役を引退(02・2)して、今「戦後労働運動史」を勉強しています。全織同盟史や滝田さん、宇佐美さんなど大先輩の著書、関係書籍を読みながら、つづられた文字や行間にある物語も大切なことと思ひ、当時を体験された先輩からじかに話を聞かせてもらうことだ、と考え、先輩の時間をとってしまいましたが、よろしくお願ひします。

まず、全織同盟は、昭和25(1950)年11月の総同盟第5回大会を機に訣別した。総同盟の分裂大会です。総同盟は昭和21(1946)年8月1～3日に結成大会を開き、その時の役員は会長は松岡駒吉さん、副会長は金正米吉さん、常任中央委員には、後に民社党委員長になられた西尾末広さんの名前もあります。単純に右派・左派に分けると「右派」に属する人たちが固まっていたように思うのですが、それが3年もしないうちに左傾化した背景など聞かせてください。

**田中**：元凶は後に総評事務局長になった「T・M」です。この人は労農派マルキシストで完全な左翼ですよ。結成時に常任中央委員に入り、その後はGHQ(連合占領軍総司令部)と手を組んで右派の人たちを攻撃し蹴落として、のし上がってきます。GHQは戦前の労働運動を引き継いでいる旧総同盟の運動家や労働組合を嫌っていたんです。

彼の攻撃目標は、国会議員と総同盟役員を兼ねている松岡さん、西尾さんです。この人たちは戦前からの労働運動家で、攻撃の論調は「労働組合幹部なら労働運動に専心すべきである。なにが衆議院議長だ、なにが官房長官だ(昭和22年・片山内閣)」ということです。こういうことを言って扇動し、追い落としを画策したんですよ。そういう扇動が当時の社会環境からいうと正当論のように聞こえ、労働組合に受け入れやすかったですね。

### ブラッティー書簡事件

**金田**：全織同盟が総同盟と訣別し第5回大会は分裂大会になりました。それはどういうところに原因がありますか。

**田中**：底流には左傾化する路線への反発、指導方針、組織運営に対する不信感がありました。昭和23(1948)年の第3回大会で、すでに左右の対立が表面化しています。役員選挙では会長を除く全役職で定員を超え、総主事の選挙ではT・Mが現職の原虎一を破ります。この大会で左派が総同盟内に主導権を確立するんです。このことは総同盟の性格を変え、創立以来守ってきた「友愛と信義」という理念ともいべき運動の精神的基盤を切り捨てまし

たよ。こうしたことが底流にあって、その上に具体的な問題が起こり訣別の道を選びます。

その具体的問題とは、一つは、全織同盟や民主的労働運動を進めようとする産別や組合の「反対の声」を無視して「総同盟解散」の方針を打ち出したことです。

二つは、全織同盟に対して、GHQのブラッティ労働課長代理とT・M総主事が組んで組織介入してきた、いわゆる「ブラッティ書簡事件」です。

この事件は、GHQの労働課が「アメリカ労働視察に、大日本紡績労組犬山支部の支部長・T田T子を全織同盟代表として派遣することに決めた」と一方的に言ってきました。彼女は全織同盟の中央執行委員の一人であったが、T・M派と通じていたメンバーの一員です。全織同盟にも所属する大日本紡績労組にもなんら相談せずに行きつてきたわけです。こんなことを全織同盟も大日本紡績労組も認めるわけにはいかないですよ。すると滝田会長宛に、ある日突然、GHQのブラッティから「綿紡部会長・大日本紡績労組委員長の高山恒雄が経営者と結託して、一婦人組合員に圧迫を加えている。自由にして民主的な組合運動に向かって指導する意志なきことを示すものである(要旨)」と批判する書簡をよこすわけです。これがブラッティ書簡事件です。これが事の起こりです。全織同盟は機関としてこのことが事実かどうかを調査しますが、GHQ、総同盟、T田T子が言うようなことはないのです。ところが総同盟は全織同盟の調査結果を認めません。さらにT・Mが全織同盟をかく総同盟を解体させるために仕組んだ策謀だという見方も決定的になります。ここに対立が起きました。完全な組織侵害であり、干渉、介入です。今では考えられないことですよ。

三つには、独青(独立青年同盟)の活動に対する左派の攻撃です。独立青年同盟とは、「社会党の青年部」が完全に左派ににぎられ、右派攻撃の一大拠点になっており、これではいけないと、社会党右派のメンバーや全織同盟をはじめとする民主的な労働運動をやるようとする組合の有志が立ち上がって、昭和24(1949)年7月に結成された。「これからは日本の独立と民主的な労働運動が柱だ」と、全国的に活躍されました。宇佐美さん(第4代会長)が全織同盟からは参加されていました。

この独青を左派は目の敵にして「反共の名を借りた反動団体だ」「共産党のフラクションと団体質だ」「分派活動」と、総同盟大会でのことを取り上げ、右派に対して全力を集中して攻撃してきましたよ。T・M総主事を中心とする左派グループの戦略です。結局この時は大会で組織的に否定されました。民社党が結党されたとき、民社青同(民主社会主義青年同盟)としてまた火は燃え上がりました。

こうした問題が複合的原因になって、全織同盟は総同盟と訣別をしました。

## ニワトリからアヒルへ、総評の左傾化

### 反対派を制し、貝塚大会で脱退を決定

金田：労働界は離合集散の歴史とも言われます。総同盟の分裂もそうでした。全織同盟が総評を脱退したのも、その歴史の中の出来事です。総評脱退を決意し、脱退を大会で決議した当時のことを聞かせてください。

田中：第二次世界大戦が終わり、アメリカを始めとする連合国は日本の民主化政策をとりました。労働運動、労働組合の育成もその一つでした。戦後の労働運動には、戦前の総同盟の流れと、共産党が指導する産別会議の流れの二つがありました。GHQの労働部は、日本

を民主化するために、また過去の軍国主義を一掃するために共産党を利用する方針をとりました。共産党はこの方針にのって「共産党の労働運動」を進めます（2・1ゼネスト）。日本に革命を起こすような運動です。日本の労働者は馬鹿ではありません。そんな運動をいつまでも許しません。政党や一部の左翼リーダーに引きずり回されるような労働運動ではない「自由にして民主的な労働運動」を求める大きな流れが力をつけてくるのですよ。この流れが「総評結成」に行き着くわけです。

総評（日本労働組合総評議会）の結成は昭和25（1950）年7月11日です。ところが、「友愛と信義を大事にし、自由にして民主的な労働運動を進めよう」とお互いに誓い合って総評を結成したにもかかわらず極度の左傾化をします。昭和26（1951）3月の第2回大会で左派勢力が多数を占め、事務局長に、総同盟でも左傾化の元凶といわれた高野実が就任するんです。結成2年で左傾化は激しくなり、昭和25（1951）年6月に勃発した朝鮮動乱についても、南朝鮮を攻撃してきたのが北朝鮮であるにもかかわらず、北に同情を示すような傾向が出てきました。このように急激に左傾化した総評を、マスコミは「ニワトリからアヒルへ」と評した。ニワトリと思っていた卵が、孵ってみたらアヒルだった、というぐらい総評の姿が変わったということですね。

総評の左傾化した運動に対して、修正をするように発言を繰り返しました。しかし、いくら公式の会議で意見を述べても左派は数の力で否定し、聞く耳を持たないんです。それで、全織同盟、海員組合、日放労（NHK）、全映演の4つの産別（4単産という）は、総評の指導方針を批判するあの有名な「四単産声明」を昭和27（1952）年12月25日に発表することになります。これをもって総評大会に臨みますが、指導部とそのグループは無視をします。これではもう民主的な労働運動はできません。総評脱退の方向へ進むのです。

### 「なぜ全織同盟は総評を脱退するのか」で全国を巡回

**金田**：構成組織のなかには「総評を脱退すべし」とする本部方針支持派と反対派との対立があり、執行部は苦しい立場にあったのではありませんか。

**田中**：総評脱退については、昭和28年（1953）年9月の全織大会（熱海大会）で「総評脱退を決意する」方針を提案しているんです。賛否両論の応酬で大変な大会になりました。路線対立です。

**金田**：反対だった業種はどこだったですか。

**田中**：羊毛、麻の組合と、綿紡の一部でした。羊毛では、現在加盟していませんが、大阪の泉州労連が反全織で地方では影響力を持っていました。それでもね、組合によっては幹部の一部だけが反全織だ、ということで内部が割れている所もありました。内部がまとまらないと悩む幹部もいましたよ。

**金田**：熱海の第8回大会で「総評を脱退する」基本的な態度を決めて、その後、執行部が手分けをし「なぜ全織同盟は総評を脱退するのか」ということを知ってもらうために全国を巡回されますね。その時の反応はどうだったんでしょうか。

**田中**：七つの班をつくって工場の組合を訪問しました。というのは、その頃は大手でも単一の組合組織に整備されていなくて、〇〇工場労組という単位が決議機関の単位でもありましたから、組合によっていろいろ意見はありましたが、訪問しますとね、全織同盟の役員、

職員に対する信頼度はすごく高かった。話をよく聞いてもらいましたよ。

少し横道にそれますが、当時のオルグの様子を話しますとね、賃上げ闘争の前に手分けして全国を回るんです。その時、青年対策部長をやってしまして長野県が担当でした。主力組合は鐘紡、呉羽紡ですが、私が行くとそこの青年婦人部の代表者が県下と一緒に回ってくれるんですよ。一緒に旅館に泊まりましてね。「この方針で闘いを組む」と話しますとね、「ヨシッ」と応えが返ってきましたよ。信頼感は強かったですよ。今も忘れられないオルグの思い出です。

**金田**：全国を手分けして巡回し、全織同盟の方針を説明されました。そしていよいよ貝塚大会で「総評脱退」を決めるわけです。当日の会場の外の様子や大会の様態を聞かせてください。

**田中**：「総評脱退・新組織結成」（昭和29〈1954〉年・全労会議結成）を大会議案に上程し、それを可決決定したのは、昭和28〈1953〉年11月14日に開いた大阪・貝塚市公会堂での臨時大会です。

第8回熱海大会（9月）で総評即時脱退（緊急動）は否決されましたが、この日は、会場入り口に総評や左派社会党が動員をかけた他産別の組合幹部、組合員、党員が大挙して押しかけ全織攻撃ですよ。労働歌を唄う、マイクでのアジ演説をする、手に持てないほどのビラを配るんです。中身は総評脱退に向かう全織同盟に対する嫌がらせです。「御用組合」「裏切り者」「労働者の敵」という彼らが常套語とする罵詈雑言（ばりぞうごん）の氾濫（はんらん）です。

その頃は、今のような携帯マイクなんてものはありませんから、そのへんの電灯線からコードを引いてきて鳴らす拡声器です。それをこちらの警備担当が蹴飛ばして壊したりしたものです。

熱海大会では、静岡県支部の今は亡き矢田彰君が、警備の責任者で勝負をかけていましたし、大阪は大阪で、これまた今は亡き前田君を始めとする猛者が揃っていましたから、激しい攻防戦をやりましたよ。とてもじゃないが、今の大会のような「やわ」なムードではなかったです。そんな騒然とした中で「私たちは大会を守る」意志というか「志」ですね。そうした気概を持って大会運営にあたりました。

大会を守るということは「俺たちの方針を堅持しながら物を決める」とい決意です。

#### **当時、小学校の講堂・雨天体操場が大会会場**

##### **「全面講和か単独講和か」「再軍備反対」も議論のなかへ**

**金田**：入り口からそうした状況ですと会場の中も興奮状態では。

**田中**：会場の中も緊張感があり、熱気満ちたりですよ。代議員どうしの暴力行為はなかったけども、感情的にチカチカするものはありました。自分の意に添わない発言があると代議員席からも傍聴席からもヤジ、怒鳴り声が飛んできましたよ。足を踏み鳴らす者いますしね。ひどかったです。

そういう点では、臨時大会が公会堂でしたからまだましでした。少し横道にはいりますが、あの頃は今のように設備が整った「箱物」がない時代ですから大会というと小学校とか中学

校の講堂または雨天体操場（今の体育館）を借りました。そこに子供たちの机と椅子を並べて会場にしましたよ。机は開け閉めできるふたがついているものですあから、反対とか気に入らない時はそのふたをバタバタやる、椅子をガタガタやる、床は板ですから脚踏み鳴らしますしね、音響効果は抜群でしたよ。昨今のゼンセン大会とは比べようありません。こうして説明しても想像すらできないのではないですか。

大会の熱気とか形、発言の内容も違いました。当時は終戦後の貧しさが続いており、現体制への反発、共産党による扇動で社会主義に対する劣等感と憧れの風潮としてありました。世界は米・ソ対立による冷戦構造ができる。朝戦動乱が勃発する、共産主義国家が生れるなど、国内外とも混乱しザワザワしたもののがうごめいていました。そういうことが労働組合の中にも大きく影響していましたから、発言も「全面講和か単独講和か」「再軍備反対」「アメリカの植民地主義反対」「独占資本との対決」「反動内閣打倒」とか、こういうやりとりが運動方針の基本論議で出てきましたよ。

それに代議員は「発言をしなくてはならない、意思表示をしなくてはならない」という責任感と義務感が大会出席の大前提にありました。時代が違うといえは違いますが、当時を経験した者は、昨今の大会に淋しさを感じます。もちろん議論のための議論は無用ですけども、いつの時代でも発言しなくてはならないことがあると思いなす。発言をして運動方針や方針を大きくふくらまし、そのことを通じて「切磋琢磨」することも大切なことです。

**金田**：大会記録をみますと、大会の間、その日の休会に入る時間が午後9時、10時ときには11時頃というのがありますが…。

**田中**：その通りですが、それで終わらないんですよ。それからグループに分かれて非公式の会議、当時言われたところの「フラク会議」ですよ。今はこんなことはないでしょう。フラクという言葉もないでしょう。それを終えて寝るのは深夜ですから、これまた気力と体力がいりましたよ。

熱海大会の逸話があるんです。当時熱海といえは温泉街だけでなく、日本の中でも有名な「遊興の街」ですよ。町にすれば全国から人が集まるのだから「それなりに金が落ちるだろう」と期待をしていたそうですが、その期待を見事に裏切ったんです。代議員も傍聴も毎晩深夜までの会議ですから、旅館から外に出る間がなかった。金を落とす間がなかったということです。街にすればつまらない客だったかもしれませんが、真面目さという点では全織同盟の評価が高まったですよ。大会の間は気を抜く間がなかったということです。

少し話が横にそれましたが、元に戻します。丁々発止のやり取り、賛否両論の対決、緊張と騒然、投票結果発表へと会場の中は膨れ上がりました。そして、最後は全織本部提案の「総評を脱退する」議案が可決決定しました。

### **脱退決定に必要な票数を3票超える**

**賛成285、反対105、保留30票**

**金田**：決定した投票結果がまた凄いです。

**田中**：そうですね。総投票数432、無効3、有効420、原案に対して賛成285、反対105、保留30で、「総評脱退」が確定しました。

この議案は過半数の賛成で決まるのではないんです。3分の2の賛成が必要です。投票結果は、可決決定に必要な3分の2の282票をわずか3票を超えるというきわどい数で決まりました。結果はきわどかったですが、私たちは「勝つ」という自信がありましたから、案外、冷静に結果が出るのを待ちましたよ。

**金田**：総評脱退を決めたことにより、全織を脱退する組合が出ました。

**田中**：第8回の熱海大会で脱退方針を決定した後、反対する組合は「全織同友会」という連絡機関を設けて、総評とも連絡を取り合いながら反対勢力を伸ばそうとしました。そして「第二全織」の結成をめざしましたよ。全織同盟は、これらの組合に対して教育宣伝活動を強めたり、説得に努め、最終的にはほんの一部の組合だけになり「織労協」に変質しましたですよ。

それで脱退した組合ですが、大会の前に全蚕糸労連（後の繊維生活労連）が、貝塚大会の後には麻部会の小泉製麻、東織労連、帝国製麻、中央繊維、東京麻糸の5組合が脱退し、昭和28（1953）年2月に麻部会は「全麻労連」を結成しています。

しかしその後、全麻労連の組合に倒産の危機や合理化問題が発生し、全織が全面的に支援します。また賃上げ闘争でも単独ではうまく進みません。そうしたことから各組合の中に全織復帰の機運が生まれ、2年後に実現しました。

**金田**：脱退組合が出るということは苦しいですね。

**田中**：脱退組合が出ることは、かっこう良くありません。関係する役員や担当者は責任を感じますし、精神的に辛いですよ。また、組織的には会費納入人員が減少するわけですから財政的にも困りましたよ。しかし組織は有り難かったです。全織職員の年末一時金を支払うためにカンパをしてもらえました。こんな状況の中で、支部の常任から「賃金が上がらなくても我慢する。初志貫徹でいってください」という手紙が来たりしました。常任にも生活があるわけだし、賃金だって高くありませんが「苦しくともここでくじけてはいかん、負けてはいかん」という「意気込み」がありました。

### **総評の路線を批判し、四単産声明を発表**

#### **12月25日、徹夜で声明書の発送準備、心燃える！**

**金田**：前後するんですが、「脱退」を決定する前段として四単産批判（声明）を全織は同志組織と発表しました。それが昭和27（1952）年12月25日です。書記局全員で声明書を全国に発送されたとか。

**田中**：四単産というのは全織同盟、海員組合、日放労（NHK）全映演です。25日の夜、印刷をしたこの声明書を海員組合の人たちと一緒に、全国の労働組合に発送する準備をしました。全織の本部は木造でね。当時「三田」にありました。宇佐美さん、書記長の斉藤さんもみんな一緒でしたよ。封筒の表書きはみんな手書きですよ。何通ぐらい出したかなあ。さだかな記憶はありませんが一万通近く出したのでしょうか。徹夜でした。

私たちは「日本の労働運動の夜明けだ、クリスマスプレゼントだ」と声を掛け合いながら燃えていましたよ。この夜、滝田会長、海員組合の和田春生さんが記者会見を終えて私たち

が作業している所に来られて「ご苦労さん、新しい夜明けだ。必ずわれわれの時代が来る、ガンバロウ」と激励の言葉をかけてもらいました。胸がふるえましたよ。

振り返るとあの時から50年過ぎました。ほんのこの前のようですが半世紀です。その年月を超えてもなお気持ちは「全織同盟」ですよ。ぬぐい切れないと言うのだろうか。

あと一点についてふれます。「同盟」という文字、意味、言葉です。ゼンセン同盟は9月（平成14年・2002年）にCSG連合、繊維生活労連と組織統合して「UIゼンセン同盟」になりました。このことで素晴らしいと思うことは「同盟」という名前が残ったことです。連合の中で「同盟」とついている産別がいくらかあるでしょう。

「同盟」というのは、「攻守同盟」の「同盟」なんです。攻めるも守るも同盟ですよ。共同の目的のため、同じ行動をとることを約束するのが「同盟」というものです。「同盟」という文字、言葉には大きな「意味」「約束」「価値観」がある。「友愛と信義」という言葉がありますが、信義を守るとは、「決めたことを守る」ことです。全織同盟からゼンセン同盟へ、脈々と流れている精神であり背景ですよ。

UIゼンセン同盟になりましても、この「同盟」と「信義」を、ただ言葉として語るのではなく、重い意味があることを理解して「覚悟」をもって語ってほしいと思います。

今風でない余分なことを言うようですが、世の中が変わっていく時というのはいろいろと心配がつきまとうんです。先輩の良い所であり、わずらわしい所と思って許してください。今日は久方ぶりによく話しました。「愚者は体験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とのことわざがあります。これからも大勢の先輩に出会われて歴史を語ってもらって下さい。

**金田**：貴重なお話をたくさん聞かしていただき、有り難うございました。激しい路線対立と論争、原案否決、役員選挙での候補者の落選と、まだまだいろんなことがあるわけですが、歴史をひもとくたびに、今更なんですけど驚いています。UIゼンセン同盟が今ありますのは、先輩のみなさんが強力な指導性を発揮され、未来に対する洞察力をもって困難を乗り越えてこられたからです。ただただ感服いたします。自分が歩んできた道のりの甘さを痛感し恥じ入っています。これから機会を見つけて、先輩の「偉業」を後輩に語り継いで生きたいとおもいます。私も勉強を深めて、また話を聞かせてもらいたいと思います。今日は本当に有り難うございました。（平成14（2002）年10月31日）